優秀賞

# あたりまえの水

関東学院中学校
三年　翠川　楓子

今回、「水の作文」を書くにあたり、思い出す一枚の写真がある。その写真には、蛇口から出る透明な水に喜ぶアフガニスタンの子ども達の輝かしい笑顔が写っていた。

アフガニスタンというと、四十年続いている戦争や紛争を思い浮かべる人が多いと思うが、二〇〇〇年から二〇〇六年に起きた大干ばつも同じくらいに深刻な問題である。これにより、水不足に苦しみ命を落とす人々が多くいた。

人は水がなければ生きていけない。水がなければ農作物も育たない、家畜も死に絶えてしまう。小さな子ども達は、清潔な水が飲めず汚い水を飲み、感染症などにかかり命を落としてしまう。日本に住む私達は、その「命の水」を、蛇口をひねれば簡単に清潔な水としてふんだんに利用できるというのに。

「水がなくて人が亡くなる」などと想像するのも難しいところである。しかし、この地球上で水不足によって苦しめられている人々が多くいるということを他人事として捉えてはいけない。なぜなら、地球温暖化の原因である二酸化炭素を排出し、地球上の気温を上げている国は圧倒的に先進国だからである。その経済活動のしわ寄せがほとんど二酸化炭素を排出しない途上国の人々に及んでしまっている。アフガニスタンも同様である。本来アフガニスタンは、干ばつ前は自給率九〇％だ。そして国土は日本と似ていて四分の三は山である。標高の高い山も多くあり、冬に降り積もった雪が夏に少しずつ解けて農地を潤す。国民の八割が農業で食べているそうだ。

そんな干ばつ前の状態に戻そうと、長年にわたりアフガニスタンで人々の病気の治療をして、多くの命を救ってきた日本人医師、中村哲氏により、全長二十五㎞もの用水路が造られた。その先にあるクナール川は、高い山脈に囲まれ、雪解け水を常に蓄えてくれている。そこから乾いた大地まで水を引いてきたのだ。それにより三〇

〇〇ヘクタールもの大地を潤した。その大きさは東京ドームおよそ六百四十個分だ。その水は乾いた大地に多くの実りをもたらし、清潔な水があることで子ども達が病気になることや命を落とすことが減った。私はその用水路を写真でしか見たことはないが、一面植物の緑色で覆われた敷地に一本の用水路。太陽の光を受け、煌めく水はとても美しかった。その水は現地の人々から「真珠の水」と呼ばれているそうだ。初めて綺麗な水を見たアフガニスタンの子ども達はその水の煌めきを瞳に映しながら何を思ったのだろう。幸せな未来を描き、永遠に続くと思ったであろうか、それともまた干ばつに……。などと遠く離れたアフガニスタンの子ども達に思いを馳せると同時に水資源について改めて意識せざるを得ない。

この地球上の水は無限にある訳ではない。ふと日本、私達の生活が気がかりになる。私達の水の扱い方はどうであろう。水資源を無駄にしていないだろうか。家庭で自分にできることを考えてみた。お風呂でシャワーを出しっぱなしにしない。歯を磨く時も同じだ。野菜や果物を洗う時は水を張ってため洗いにする。これらはとてもとても小さいことである。しかし、日本、いや世界中の人々が、小さなことでも意識を持って生活をしたならば、地球上の大切な水を守ることに繋がるだろう。今頃になってこんなあたりまえに気がつくとは情けない限りである。けれども、井戸を掘り蛇口から出た透明に輝く水を初めて飲んだあのアフガニスタンの子ども達は、この「水」があたりまえではないということに、とっくに気づいているはずだ。

限りある水資源を未来に繋げていくためにあたりまえの水の意識を変えること、そして、一人ひとりが水の使い方を見直していくことが私達の課題だ。水のありがたみを理解し、水は無限ではないと常に意識していきたい。